

# 日本ミルトン協会第 13 回研究大会

## シンポジウム資料

於：龍谷大学深草キャンパス／Zoom ミーティング

日時：2022 年 7 月 2 日 (土)

## 対面・オンライン同時開催に際して

### ○大会への参加方法

本大会は対面と Zoom ミーティングにて開催されます。Zoom への参加アドレスは、大会開催の週の6月26日(日)と大会前日の7月1日(金)13時頃に、メーリングリストを通じてお知らせします。なお、新型コロナウイルスの感染拡大の状況と開催校の都合により、オンラインのみの開催となる場合があることもご承知ください。開催形態に変更が生じた場合、メーリングリストとホームページを通じてご案内いたします。

### ○メールアドレスご確認のお願い

事務局よりご連絡をする際に会員宛の一斉メールをお送りしていますが、これまでにメールが届いていない先生方、葉書でのご連絡のみでメールアドレスを事務局にお知らせいただいていない先生方におかれましては、協会のアドレス [john.milton\[アットマーク\]maj.gr.jp](mailto:john.milton@maj.gr.jp)\*まで、メールアドレスをお知らせください。

6月26日(日)13時頃に大会のアドレスを掲載したメールお送りします。メールが不着の場合には、大変お手数ですが、上記アドレスまでご連絡ください。

\*[アットマーク]を@にかえてください。

以下、**Zoom** でご参加される先生方へのご案内です。

### ○研究発表のハンドアウト

研究発表のハンドアウトは、大会前日の7月1日(金)13時頃に配信するメールに添付する予定です。また、大会当日も添付ファイルとして配布します。

### ○研究発表中

研究発表中はマイクとカメラをオフにさせていただきますようお願いいたします。質疑応答時、発表者と直接お話になる時はマイクと（可能であれば）カメラをオンにしてください。

### ○総会資料

総会資料は、大会前日の7月1日(金)13時頃に配信する、大会アドレスを記載したメールに添付する予定です。当日も添付ファイルとして配布します。

# 日本ミルトン協会第13回研究大会プログラム

日時 2022年7月2日(土) 14時00分より[13時50分受付開始]

場所 龍谷大学深草キャンパス 22号館 302号室

Zoomによるオンライン同時配信[13時50分より入室可]

○委員会 (12:30~13:40)

22号館 302号室

○開会の辞 (14:00~14:05)

会長 富樫 剛

○シンポジウム (14:00~16:15)

本当らしさと驚異

——タツ、スペンサー、ミルトンにおけるエピックとロマンス

オーガナイザー 森 道子

1. トルクァート・タツの詩論における「本当らしさ」と「驚異」について  
村瀬 有司

2. 女戦士は「本当らしい」か  
——『エルサレム解放』のクロリンダ・『妖精の女王』のブリトマート  
水野 眞理

3. タツの詩論と *Paradise Lost*  
森 道子

○総会 (16:20~16:50)

司会 富樫 剛

1 2021年度活動報告  
笹川 渉

2 2021年度会計報告および会計監査報告  
花田 太平・金崎 八重・桶田 由衣

3 2022年度予算審議  
花田 太平

4 2023年度—2025年度 会長および委員について

富樫 剛

5 論集の発行について

富樫 剛

6 今後の活動予定

富樫 剛

7 その他

○ 閉会の辞 (16:50～16:55)

会長 富樫 剛

## シンポジウム

### 本当らしさと驚異

——タッソ、スペンサー、ミルトンにおけるエピックとロマンス

司会・講師：森 道子（大手前大学名誉教授）

講師：村瀬 有司（京都大学文学研究科准教授）

講師：水野 眞理（京都大学名誉教授）

ミルトンが『教会統治の理由』で叙事詩制作の抱負を語り、その範として、ホメロス、ウェルギリウス、タッソを挙げていること（“that epic form whereof the two poems of Homer and those other two of Vergil and Tasso are diffuse...model”）と、イギリスの先達詩人としてスペンサーを最も敬愛していたこと（“which was the reason why our sage and serious poet Spenser, who I dare be known to think a better teacher than Scotus or Aquinas”『アレオパジティカ』）は周知のとおりである。そのスペンサー自身は *The Faerie Queene* の序に掲載した Sir Walter Raleigh 宛の手紙の中で、ホメロス、ウェルギリウス、アリオスト、タッソに範を仰いだと記している（“I have followed all the antique Poets historicall, first Homere...: then Virgil: after him Ariosto: and lately Tasso”）。スペンサーとミルトンはともに古代の2大叙事詩人とルネサンスの詩人タッソを同列に並べているのである。

スペンサーの *The Faerie Queene*、ミルトンの *Paradise Lost* におけるタッソの *Gerusalemme liberata* の存在に関する研究はすでに多い。Armida の庭園(*GLXV*, 55-62)の the Earthly Paradise と Carpe diem のテーマが the Bower of Bliss (*FQ* II, xii, 60-68) へ、さらにエデンの園 (*PL* IV, 159-71; IX, 417-62) へと継承されたことはよく知られている。

タッソ (Torquato Tasso, 1544-93) の活躍した 16 世紀イタリア文壇ではギリシア・ラテン語のエピック（古典叙事詩）と自国語によるロマンス（騎士物語）の対立と相克が峻烈で、両陣営ともアリストテレスの詩論 (*Poetics*) に依拠して議論白熱であった。タッソはこのアリストテレスの詩論を重視しつつもロマンスの魅力を切り捨てることなく、両者の折衷、融合、和解を探求し続ける。自らの叙事詩 *Gerusalemme liberata* (1575) 制作（出版）の前後に詩論を作成し、その実践の裏付に努める。特に『詩作論』 (*Discorsi dell'Arte Poetica*, 1587) と『英雄詩論』 (*Discorsi del Poema Eroico*, 1594) は国内外で大反響を巻き起こす。なお、タッソは『英雄詩論』において、叙事詩と英雄詩を同義語として用いている (“the epic poem, or the heroic, if we

prefer that name”）。プラツ (Praz, Mario) はミルトンにとってのタツソの最重要性は詩論の指針にあると言う。

本シンポジウムでは、タツソの詩論の主張に基づいて、タツソ、スペンサー、ミルトンの長編詩を検証する。タツソは『詩作論』で、古典叙事詩とロマンスの特徴をそれぞれ次のように分類している。プロットの単一性 (unity) と多様性 (multiplicity) 、及び本当らしさ (verisimilitude) と驚異 (meraviglia/wonder) である。真の英雄詩には相反する双方が必要不可欠であり、それも、別々に存在するのではなく、単一なプロットは多様性を、超自然の驚異は本当らしさを同時に備えていなければならない、と強調する。この特有で傑出した提案、指針が *GI*、*FQ*、*PL* にいかにかに（採用）受容され実現されて、崇高、壮麗な英雄詩を成立させるに至ったかを探究、検証する。

トルクアート・タッツ（1544-1595）は、アリオストと並んで16世紀のイタリアを代表する詩人であり、後世のヨーロッパの文人に大きな影響を及ぼしている。そのなかには、スペンサー、ミルトンをはじめとする英国の大詩人も含まれる。今回の発表では、この2人の詩人の長編詩にも関連すると思われる、タッツの「本当らしさ」と「驚異」という一対の創作理念を、その詩論に即して報告したい。

タッツは、代表作の『エルサレム解放』を執筆するかたわら英雄詩の創作技法を探求し、その成果を複数の論考にまとめている。その創作理論はアリストテレスの『詩学』に依拠しており、特に「模倣」「プロットの統一（単一性）」「本当らしさ」という3つの創作理念を重視している。その一方でタッツは、イタリアの騎士物語の特色であるプロットの「多様性」と超自然の「驚異」を作中に取り込む必要性にも言及している。イタリアでは、15世紀後半から16世紀の初めにかけて、ボイアルドの『恋するオルランド』とアリオストの『狂えるオルランド』という騎士物語の傑作が相次いで刊行された。この2つの騎士物語は、多様な挿話を次々に展開しながら、巨人や怪物や魔法の指輪といった現実にはありえない存在や出来事をしばしば描き出している。このような筋の「多様性」と超自然の「驚異」を、「単一性」と「本当らしさ」を堅持しながらいかにして作中に導入するか、読者を楽しませる騎士物語の要素を、どのようにしてアリストテレスの『詩学』の創作理念と両立させるか、この問いがタッツの創作理論の主題の1つとなっている。

タッツが英雄詩の創作において重んじた「本当らしさ」は、読者にとって作品が本当らしく見えること、一種のリアリティの効果を意味している。この「本当らしさ」と超自然の「驚異」を融合する方策として、タッツは創作理論のなかで、大多数の人々が信じている見解（キリスト教の教え）を利用する方法と、筋立てに関連するやり方（挿話として中間部に驚異を入れる方法）を挙げている。一方、創作理論では触れられていないが『エルサレム解放』からうかがえる方法（伝聞情報や主観性の利用）も存在する。また、タッツの創作技法の理論的展開のなかで新たに導入された方法も認められる。晩年の論考において重要となるアレゴリーによって驚異を正当化するという考え方がそれである。

このようにタッツの詩論と創作において重要な位置を占める「本当らしさ」と「驚異」の問題について、いくつかの特色をピックアップして報告したい。

## 女戦士は「本当らしい」か

——『エルサレム解放』のクロリンダ・『妖精の女王』のブリトマート

水野 眞理

エドモンド・スペンサーがその『妖精の女王』（1590, 1596）執筆の際にイタリアのロマンス作品・エピック作品を参照したことは早くから知られている。テーマに関してスペンサーは、1590年版で序文の役割を帯びた「ローリーへの書簡」の中で、紳士が目指すべき「立派な統治者と有徳な人間の姿」を示すものとしてアーサーを描き出したと述べ、その先行例としてアリオストの『オルランド狂乱』の主人公を公徳と私徳を兼ねた存在として挙げ、それに続いてタッソの『エルサレム解放』のリナルドを私徳、ゴッフレードを公徳の体現者として挙げている。しかし実際にはゴッフレードはともかくとして、オルランドもリナルドも、愛欲に迷って本来の任務を忘れる点では決して模範的な美徳の体現者とはいえないし、『妖精の女王』の登場人物でオルランド、リナルド、ゴッフレードをコピーしたとみなせる人物はない。これに対し、スペンサーがアリオストとタッソに明らかに範をとっているのは女騎士ブリトマートである。

『オルランド狂乱』における女戦士ブラダマンテは、異教の戦士ルッジェーロと結ばれて、エステ家の創始者という位置に置かれる。いっぽう、『エルサレム解放』における異教の女戦士クロリンダは、夜襲の際にいつもと異なる甲冑を身につけていたために、彼女に想いを寄せるキリスト教の戦士タンクレディとそれと知らずに殺し合う運命にある。またジルディッペとオドアルドは夫婦で十字軍に参戦し互いを気遣い守り合いながら戦う。作者の時代の為政者の祖先神話を形づくるブラダマンテは、スペンサーによって、『妖精の女王』で騎士アーティガルと結ばれてエリザベス一世に繋がる血統の始祖となるブリトマートに甦らされている。女王を戴く英国の詩人であったスペンサーにとって、闘う女性はタッソにとって以上に重要な要素であっただろう。また、ブリトマートとアーティガルは甲冑に正体が隠されて互いにそれと知らずに剣を交える点で、クロリンダとタンクレディの再来でもある。さらに、『妖精の女王』第3巻のタイトルになっている貞節（Chastity）とは、愛し合う男女の誠実さの意味で用いられる点で、タッソのジルディッペとオドアルドを想起させるものでもある。

タッソが『エルサレム解放』執筆と前後して著した詩論においては、「模倣」「プロットの統一（単一性）」「本当らしさ」が重視されると同時に「多様性」と超自然の「驚異」を取り込むことが論じられている。ブリトマートが登場する『妖精の女王』第3、第4、第5巻は次から次へと人物や事件が入れ替わ



り、プロットの単一性からはほど遠い展開を見せる。また怪獣、魔法使い、魔女、古典神話の神々、変身、など現実にはあり得ない要素が満載されている。『妖精の女王』はタツソよりアリオストのロマンス世界を体現しているのだろうか？その中であって女戦士も、驚異、すなわち怪物や奇跡と同様のありえない素材の一つにすぎないのだろうか？本発表では、村瀬氏の発表を受けてタツソが女戦士をどのように正当化しているかを見たのち、その基準に照らしてみたとき、スペンサーのブリトマートをどのように評価できるのかを考えたい。また、タツソが用いなかった女巨人やアマゾンの女王も『妖精の女王』には戦闘的な女性として登場することの意味を考えたい。

ミルトンはホメロス、ウェルギリウス、タッソに倣う叙事詩制作の野心を表明し、タッソの詩論（主に『詩作論』、『英雄詩論』）に拠り所を求める。タッソの詩論は自身の詩 *Gerusalemme liberata* の指針、解説として執筆されたが、ミルトンは仔細に検討し、*Paradise Lost* に実践している。The Trinity Manuscript には旧約聖書に題材を得る悲劇の企画が 53 件、“the fall of man” を主題とする劇の草案が 4 件残されているにもかかわらず、ミルトンは叙事詩を優先する。その理由は、タッソが詩論において叙事詩は悲劇に優る文学形式だと結論したことによる。当時まだ絶大な権威を持っていたアリストテレスの『詩学』が、叙事詩に対する悲劇の優位を説くのに反論し、タッソはプラトンの説も後ろ盾にして叙事詩こそ最高の文学形式であり、“magnificence” と “sublimity” を最も具現すると主張する。まさに、“magnificence”こそミルトンが希求する性質である。

本発表では、その詩論の主眼、エピックとロマンスの融合をミルトンがいかに *PL* に採り入れ、実現させたかを探る。騎士物語に心酔した時期、アーサー王を主人公とする叙事詩を考慮した時期もあったミルトンにとっても、エピックとロマンスの問題はジレンマでもあった。ギリシア・ローマ古典とともにロマンスの世界も、真の意味での “heroic” ではないと切り捨てているにもかかわらず、両者なしでは *PL* は無味乾燥となる。タッソの折衷案のおかげで、自由自在に登場する両者が彩を添えることになる。

「本当らしさ」と「驚異」とを合わせ持つエピソードを駆使して、エピックの単一性とロマンスの多様性が両立される。ミルトンのメインプロットでは人間の不従順と神の子の従順が平行する。*PL* 中の代表的驚異とされる罪 (Sin) と死 (Death) の姿、Limbo の有様など、目に見える異教の映像に対し、天地創造、神の子の贖罪、恩寵 (Grace) と人間の救済などはキリスト教の目に見えない超自然的驚異である。*PL* における「本当らしさ」と「驚異」とを合わせ持つエピソードを探り、それらがいかにメインプロットの援助（促進）、あるいは妨害となって、単一性を維持していくかを明らかにする。

なお、タッソは叙事詩に最適の詩形を *ottava rima* と強調するが、ミルトンはタッソの別の詩 *The Creation of the World* の *blank verse* に範を求める。

最後に、タッソが hero にふさわしい感情 (passion) と強調する、怒り (wrath) と愛 (love) に言及したい。タッソは『イリアス』のアキレウスの怒りから発して、感情のもう一方の性質、愛について詳細に解説している。怒りと愛は *PL* においても主要な要素である。

